

山本孝作

**細**木の山本孝作（金戸出身）は昭和十三年現役兵として富山三十

五連隊に入営し、翌十四年五月十日には一五〇〇名と共に中国で編成された独立混成第九旅団独立歩兵第三十八・三十九大隊に配属される。

四年間中国の山西省太原などで警備・**肅**正の任務に従事する。共産軍を山奥の谷間に押し込んで谷の出口を塞ぐという任務を繰り返した。昭和十七年の第二次長沙作戦は悲惨で七〇〇人も戦死するという全滅に近いもので、富山の同年兵四十人中生き残ったのは三・四人であった。

昭和十九年三ヶ月ほど召集解除で帰還したが、十月五日に富山歩兵第六十九連隊補充隊として再召集されて郷土将兵三〇〇人の一人として南方のマレー半島に向かった。十一月呉港から二十三隻の船団であったが、台湾近くで敵潜水艦に攻撃を受けつつサイゴンに逃れ、十一月二十二日残った兵だけでシンガポールに上陸し防衛勤務に就いた。富山団は解散させられ野砲兵第九

十四連隊に編入し無線通信の教育を受ける。マレー半島では大きな戦闘はなく、時たまB29の爆撃を受ける程度であった。後にタイペイの二十九連隊の司令部付きとなり数ヶ月で終戦を迎える。終戦一週間前に銃の菊御紋を削り落としエナメルを塗る作業をしたので終戦間近いことを察知したと云う。

終戦後二年間はコタバルで捕虜生活を送るが、イギリス軍が来るまでの二ヶ月の間に将校の軍刀を埋めたり、食料が不足するかもしれぬと現地人に隠してもらったりした。また糧秣倉庫があり志願して食料を取りに行くが、警備の保障はなく現地夜盗の襲撃をかくぐる命がけの任務をした。

復員はコタバルからシンガポールへ行き佐世保に上陸したが、昭和十三年から二二年までの兵役は金戸で一番長いものであった。

## 長

沙作戦とは、日米開戦以前の中和十六年一月から秋までは中国に圧力をかけ、それ以後は「治安維持、占拠地域の肅正を主目的とし、大規模作戦はおこなわず」という方針を決めていた。これに抵抗して日本の中国派遣軍の阿南惟幾第十一軍司令官は独断で作戦範囲を逸脱し長沙の一角に突入するが、中国軍の反撃にあい一月十五日に

旧占領地に撤退する。これが第二次長沙作戦であり、この作戦の犠牲者は、太平洋戦争初頭の作戦ではフィリピン作戦に次ぐものであった。

北山清一

## 北

山清一は昭和十三年金沢工兵第九連隊に入隊し、五日後には北支に派遣され徐州駐屯している。激しい戦闘をすることなく十四年七月済南に進軍して召集解除される。

昭和十六年十月には太平洋戦争開戦のため隠密に関東軍特別大演習と称して再召集され金沢工兵隊に入隊し、約七ヶ月間軍務に服し召集解除される。そして昭和十八年に三度目の召集にあり金沢に入隊しトラック島に派遣される。制海権・制空権を失っているのに、途中に敵魚雷により四隻、爆撃により一隻と船団のほとんど被害を受け、本人も九死一生を得て青島に上陸する。現地で終戦を迎え昭和二十年十一月復員している。何故か金戸の住人がトラック諸島へ多く派遣されているが、お互い顔を合わせることもなく帰還しているのは、トラック諸島がいかに多くの島からなる一大海軍基地であったということであろうか。

北山氏は従軍中に演習以外では一発

の弾も撃つたことがなく、トラック諸島でもほとんど空爆を受けないという幸運な兵役であったと語っている。

### 品川正吉

**品川** 正吉は昭和十二年八月に充員召集として金沢工兵第九連隊に入隊し、十日余りで呉海上陸し南京攻撃戦・徐州会戦等に参戦するが、三年の兵役を終えて十四年十月には召集解除で内地へ帰還している。北山氏と同期であり同時期に従軍し中国大陸に渡るが昭和十六年七月に再召集を受けている。それは北山・石橋と同じように太平洋戦争開戦のため隠密に関東軍特別大演習と称しての再召集であったが、今回は富山歩兵第六十九連隊に入営している。中国大陸の牡丹江省に駐留し十八年一月には召集解除となり帰還している。

### 盛田豊之介

**盛田** 豊之介は昭和十六年二月に現役兵として、金沢山砲第九連隊に入隊する。一週間後釜山に上陸後鉄路牡丹江に進軍し、同地で教育訓練を受けた後、十七年老黒山に転進し警備の任に就く。終始満州にあり直接に敵

と相対する激戦がなくて錦州において終戦を迎えた。大連と旅順にて抑留生活を送り二二年四月に復員する。

### 海軍志願兵盛田清秀

## 志

願兵である盛田清秀は舞鶴鎮守府平海兵隊機関に昭和二十年二月入隊するが、新兵教育は陸軍と同じく厳しく理不尽なものであった。海軍には六角の桜棒という精神入替棒があり、三日に一度は全員の尻を過失の有無に関係なく叩かれるのであった。海軍も員数合わせには苦労するが、

三ヶ月の先に入隊した先輩兵や班長が意地悪で洗濯物や帽子を隠すことが度々あったと云う。幸い最後には戻してくれるが面白半分の員数合わせには泣かされた。

地上訓練後に舞鶴で一隻しか残っていないかった巡洋艦利根に乗船し艦上訓練をする。その利根も呉の江田島に隠れていたのが発見され、七月二七日に米軍のP51戦闘機の五十機の攻撃を受けて沈没する。

幸い海底が浅かったので機関兵として艦艇の底にいたが九死に一生で煙突から這い上り助かった。艦上には一五〇人もの兵隊が機銃攻撃をうけて無惨な姿で死んでいた。電気機関が破壊さ

れていたもので機関銃や大砲の弾が届かないのと、現場を離れることを許さない上官命令のため機銃掃射を一方的に受けて殲滅されたというのに、艦長はどこに隠れていたのか生存していたという。虎の子の一隻が沈没したので海防艦に乗り、福岡の博多で終戦を迎え解散し、八月二七日に海軍上等機関兵で復員する。

しかし九月二七日に復員省から再召集をうけて舞鶴に戻り朝鮮半島からの復員業務に翌二二年三月まで就いてから解除された。

最後の戦闘を続ける「利根」。

